

二十一世紀の河川への期待



理事長 松田 芳夫

いつの事かと思っていた21世紀に入りました。

といっても、太陽の出入りが変わるわけでも、天から“恐怖の大王”が降ってくるわけでもありません。人々の生活や仕事の中味やリズムもいつもの通りです。

私たちは新世紀というところが今までと異なり新しくなる、良い事があるのではと希望を抱きます。

とくに20世紀は、戦争や革命の連続で大勢の人が殺され都市が荒廃したのですからイメージは良くありません。

しかし、残念ながら21世紀を前世紀すなわち20世紀より良い時代にするには余程の努力を要する困難な事であるということがわかっています。

世界的な人口の増加に伴う食料不足、種々の化学物質による公害、自然環境の破壊、さらに気象異変や温暖化をもたらし地球環境問題などが立ちはだかっているのです。

これらすべてを通じて云えることは、地球は際限なく増加する人間のすべてに現在の先進国並みの快適な水準の生活を可能にするほど大きくもないし、天然資源もないということです。

医療技術の進歩と人々の考え方のため、国連や各国政府の努力にもかかわらず、今世紀中頃までは人口は増加し続けますから、破局をまぬがれるためには、すなわち地球文明を持続性のあるものとするためには、先進国をはじめ各国が資源やエネルギーの浪費を控えるのは当然のこと、我々の生活様式(ライフスタイル)そのものを省資源、省エネルギー的なものへと変革することが求められています。

このような流れの中に自然環境の破壊防止や自然生態の保全と回復の運動があります。

地球温暖化の遠因に森林の伐採や緑地・湿地の開発利用が云われています。わが国は幸いなことに山地には広大な森林が存在していますが、河川の沖積地や海岸沿いの平野・平地は農地、工場、住宅へと開発利用が進み、自然環境は殆ど残っていません。

農村地域でも、農地は土地改良が進められ農作物を最も省力的・効率的に作る、地表面を場とする工場に化していますので、農地から出てくる排水も農薬という化学物質や化学肥料を含み、都市排水と同様、汚染され下水状態となっており、近年、ノンポイント汚濁としてその対策が問題となっているところです。

一方、わが国では全国的な人口の停滞にもかかわらず、都市域の近郊では市街地の虫喰的拡大が依然として盛んであり、例えば、水田地帯に道路のバイパスが開通する

と沿道に大小の店舗が進出してきて、十年も経てば水田の中にベルト状の新市街が出来、その新市街地が十年か二十年に一度の豪雨で水田もろとも浸水することになります。

今、無秩序な土地利用を防止するのに最も必要なのは、強い強制力を伴う土地利用計画の制定だろうと思いますが、わが国のように山林が干拓地以外であれば、どんな土地でも所有者は宅地化を期待して所有しているという価値観を変えなければそのような施策は受け入れられそうもありません。

さて、開発利用の進んだ平野で、かろうじて未利用に近い状態で残されているのが、神社仏閣の境内すなわち「鎮守の森」と河川及び湖沼です。

平野において自然環境を回復する場所として現実の可能性が最も高いのがこの河川・湖沼であります。しかも水路なども含め、国土面積の3.5%、133万haもあり、さらにありがたいことにその大部分が国有地であることです。

平野の開発済の土地は公共施設の敷地を別にすれば、その殆どが私有地であることを考えるとこれは非常に大きい利点です。

リバーフロント整備センターがその一部の業務を担当している“河川水辺の国勢調査”は、建設省が平成2年から推進しているもので、河川に残されている自然生態を広く調査し、さらに経年的な変化もモニターし、河川の自然回復を図る上での基礎資料とするものです。

当センターは、昨年12月に「水辺環境GISセンター」を発足させ、河川水辺の国勢調査の成果を地理情報システム(GIS)と組み合わせ整理、公表し、広く一般の方々の利用に供することを計画しています。

国勢調査データの電子化、システム整備など現在進行中であり、円滑に皆様のご要望に対応できるようにはもう少し時間がかかりますが、鋭意努力中ですのでご期待下さい。

21世紀には、河川、湖沼さらには海岸などの水辺空間の自然環境的な価値への評価と期待感が増々高まり、防災あるいは利用のための工事も、この自然環境との調和、調整の作業なくしては実行できないことは明らかです。そして河川の自然環境を回復、発展させ人々が自然を感じる場としての再整備活動が盛んになることでしょう。

リバーフロント整備センターは、本年も河川の自然環境の改善と質の向上に努力して参りますので、引き続き皆様のご助言、ご支援を期待する次第です。